

平成十七年七月一日発行 第十六卷第七号 通巻第一六九号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成17年7月号



余生

高橋将夫

星あまた夜明け急がぬ春の闇
成功の種もいつしよに蒔きにけり
種蒔いてこれより余生なりしかな
花鳥の行く末見ゆる天眼鏡

春眠の童は夢を見て笑ふ
薄氷の解くるがごとく忘れたる
春昼の落して割れぬ器かな
金剛杵金剛鈴もあたたかし
ふくらんでゆく風船と夢にして
ぎりぎりのところで燕ひるがへる
至福とも苦行とも山笑ひをる

身 辺

木下野生

昼からの大雨予報葱坊主
空にやや風のありけりシヤボン玉
雲に入る鳥対岸はとなり町
裏山の削られてをりつばくらめ
つばくらめ大きな箱の空のまま
春の日や造花なれども壺の中
するすると寄りくるロープ春の暮
朧夜やうしろから来て煙草の火
朧夜や濡れゐて二人分の箸
夕霞道は港でゆきどまり

特別作品

知らぬ間に三人増えて溝浚へ
ちちははの二枚の写真夏座敷
横穴にくらき入り口夏の雲
表札にひとりの名前夏燕
麦秋や貼られて紙のひらひらと
麦秋や人呼ぶ声の一度きり
止り木に五羽の並んで羽抜鶏
十字路にあつまる鴉夏夕べ
青葉木菟紙の袋の口開いて
裏道のはうに人声竹落葉

槐安集

市場基巳

母おもひあれば旧正月が来る
濡れ縁に坐せば日のあり枯木坂
空晴れて旧正の川鶺鴒が泳ぐ
春を待つ風邪神さんにとりつかれ
叱らでもよかりしものを春の逝く

水野恒彦

蜃気楼さらりと船を通しけり
嶺ざくら見えみて山の晴と褻と
おのが声はるかに聞こゆ五月闇
常磐木落葉一円相に音もなく
わたつみの涛音聞こゆ蟬の穴



石脇みはる

蘭の花抱へ入りたる槐山房
つれづれに微妙なはなし著莪の花
葉桜や幹のでで虫はがしをる
斗樽を洗うてゐたり杜若
青葉木菟夜にめざまし鳴つてをり

竹内悦子

槻の木に松蟬の来て鳴けるなり
田植はや終りし山に花の雲
鬼女になれず春の鉄輪井かなわのゐにをりて
深呼吸してをる八十八夜かな
羊蹄や黄泉の国など知りませぬ

木下野生

揺れてをり白木蓮のまつ盛り
空にやや風のありけりシャボン玉
するすると動き小学校に蛇
くちなはを怒らせてをり女の子
閉ぢられしままの古書店夏燕

延 広 禎 一

二河^{にかびやくだう}白道さくら吹雪の中にをる
花の夜や金泉銀泉有馬筆
紙司と茶の老舗のあはひ柳の芽
窯変や羽根ひろげたる巢立鳥
先生の心色不二や花の山

中島陽華

明けの白蓮天空へメツセージ
やさかいかん夕闇のさくらかな
あんこ屋のべんがら格子春の雪
走り梅雨たこの吸出し貼つてあり
はらからや春の川音たからかに

栗栖恵通子

地震いまだ春の琥珀に隠れゐる
初蝶やコルクの栓を濡らしをり
春宵の影に音ある糸車
二番目の抽斗隅のさくら貝
春暁の秒針なぞる余震かな

加藤みき

海蝨も川蝨も来よ槐の辺
真ッ白き蹠ひらひら磯開
ところどころ苔の花咲く石拜む
砂山に砂山の影白楊
飛花落花黒鳥のとび立ちし水

大島翠木

高々と三輪山晴るる桜かな
楚々と歩み花の吹雪に鞆さるる
ま昼間の雨の落花とうつせ貝
竹の秋ぬぬつと出でし亀の首
あめつちに藁腰を据えてをり

雨村敏子

魂入れの墓明るうて花の山
白魚にとこしへの青ありにけり
金色の木乃伊の仮面花の冷
呉竹に昼の雨降る種袋
金雀枝や出自を問うてをりにける



槐市集

近藤公子

雲雀野やけふ一日を土の上
ひとひらに思ひのありぬ桜かな
桜東風眼あけたりつむつたり
昔ばなし聞かされてをり田螺鳴く
ひもすがらすましきつたる葱坊主

柴田靖子

様変りせし村里や蛇出づる
曇天のつづきし日々や春の風邪
日輪の使い走りか揚げ雲雀
春寒や擦り寄る猫を膝の上
落花一つ流れ逆らひとどまれり

島すが子

花吹雪纏うて朝の礼拝へ
築地市場魚臭流るる柳かな
泣きさうな空へ展げて梨の花
日矢届く藤房のまだ短かけれ
花鳥賊の蔭に干したる海女衣

鈴木勢津子

釈迦牟仏待ちに待つたる八重桜
金剛界胎藏界の春曼荼羅
歌枕大和三山春がすみ
駒ヶ根こまがねの白き嶺ある残花かな
スナメリの生れしわたつみ夏さざす



槐集

高橋将夫選

星の渦化して万朶の桜かな
枚方

中野 京子

金色の草にまぎれし土筆摘み

一雨のあとの明るさ春キャベツ

朝の日を土にすぎ込むさくらかな

春水の胃の腑を通り葦ありき

岡崎

近藤 喜子

サロメなら首置く根株ひこばゆる

ペガソスの泉の色よ春の空

落花浴ぶ吾も宇宙の一粒子

花万朶この世かの世のひと続き

一身の白銀と化す梨花月夜

文旦や虚空蔵山に抱かれて

枚方

谷村 幸子

芽吹きたる槐やここに星の渦

雲ゆくや黄檗山の雀の子

山門に入るやそびらの竹の秋

桃咲いて雨の明るし般若面

近藤きくえ

春宵の狸々舞ふや星の渦
枚方

近藤きくえ

花吹雪浴びる仁王の眼かな

朧夜の翁立ちをる銀沙灘

花の風布袋の前の大硯

六道の辻にじやれをる子猫かな

ハレルヤハレルヤ菜の花の風の色

気配してふり向いてをる花の下

まつろはぬ男の塚に春の雨

芹の灰汁土筆の灰汁が指先に

ものの芽のシルエツトとなり昏れてゆく

生薬の匂ふ石白忘れ霜

筍を焼いてをりけり盆の窪

春雷や錆び付いてをる瓶の蓋

しやぼん玉の割れる音して牛の貌

抽斗に妖精生るる朧かな

植木 戴子

近藤 紀子

銀河往来 高橋将夫

◇『对岸』（今瀬剛一主宰）5月号より。

平成俳句論考 浅田光喜

静けさの引つかかりをる蜘蛛の糸 高橋 将夫
蝮の道戻りし跡のなかりけり

前句の「蜘蛛の糸」に引つかかっているのは「静けさ」である。「静けさ」そのものは目で見る事ができないものだが、「蜘蛛の糸」をじっと見つめた結果、そこに「静けさ」が引つかかっているのと見たのである。実際に見えたものは別のものであつたかも知れないが、それを「静けさ」と捉えたところは、凝視の末の把握であろうし、自分が対象に同化した結果の把握であろう。夏とはいえ、日陰の涼しい所のような気がしてならない。

後句の「蝮の道」は俳句ではよく詠まれる。春になると活動を始め、這いまわって泥土に筋をつけることから、「蝮の道」といわれる。高野素十に「悉くこれ一日の蝮の道」という句がある。作者はその「蝮の道」を「戻りし跡のなかりけり」と詠んだ。ここには交通渋滞の細い道、しかも一方通行の自動車の流れの跡のようなものさえ感じられる。また、曲りくねっても、前へ前へと進んだ人生の足跡のようなものさえ感じられる。

氏は物を見ることに徹し、頭の中だけでは到底作ることができない句を作りあげている。「霧の中闇が流れてをりにけり」の句もその一つである。流れているのは「霧」であるが、「闇が流れて」と把握している。白と黒とのコントラストも美しいが、動くものと動かないものが逆転しているところは、幻想的な風景を思わせるようである。立っている作者さえ、止まっ

ているのか、動いているのか、めくるめくようである。
掲句は句集『星の渦』（角川書店）からのものであり、氏にとつては第二句集となる。

◇「塊集」観照

星の渦化して万朶の桜かな 中野 京子
「鷹化して鳩となる」と異なり、「星の渦化して万朶の桜」は時空を超えて存在を捉えている。

一身の白銀と化す梨花月夜 近藤 喜子
満開の梨花。月光のもとにあつて、わが身も含め一切が白銀の世界。月夜の梨花を鮮明に捉えている。

文旦や虚空蔵山に抱かれて 谷村 幸子
文旦は朱欒の一種で、ぼんたんともいう。なんともひょうきんな響きだが、虚空蔵山に抱かれて、実に雄大。

六道の辻にじやれをる子猫かな 近藤きくえ
「六道の辻」というと異界が見えてくるが、子猫にとつては無縁の世界なのだろう。無心に遊んでいる。

ハレルヤハレルヤ菜の花の風の色 近藤 紀子
一面の菜の花畑を風が渡る。この爽快感を私も詠みたいと思つたことがあるだけに、このハレルヤには絶句、脱帽。

生葉の匂ふ石白忘れ霜 植木 戴子
忘れ霜から、石白の冷たさと葉草の匂いがよく伝わってくる。